
東北芸術工科大学 紀要

BULLETIN OF TOHOKU UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

第27号 2020年3月

自閉症における自己性についての一考察

— 「見たまま」の絵を手がかりに —

A Study of the Self in Autism

— Analysis of the Pictures Drawn by an Autistic Child —

小原 拓磨 | OBARA Takuma

自閉症における自己性についての一考察

— 「見たまま」の絵を手がかりに —

A Study of the Self in Autism

— Analysis of the Pictures Drawn by an Autistic Child —

小原 拓磨 | OBARA Takuma

This is a study of the essence of the autism, analyzing the inner world and experiences of the autistic children by using their pictures as a clue, based on my on-the-job training in nursing to the disabled children. The pictures autistic children draw are generally similar. They express not their imaginations but the outside world as they see. This is because autists who are considered to be egocentric, paradoxically, have very little their own self.

“Stereotypical behavior” which autistic children show often, in a sense, supplements this selflessness. It gives them a kind of unity as the selfness just like the music. But it is temporary, so the unity disappears as soon as the movement stops. On the general development, a child builds up her own self through the relationship with her mother or a reliable adult. On the other hand, autists cannot fundamentally construct the relationship with others, this is the cause of their failure of the formation of their own self. Therefore, we come to a conclusion that the problem of the autism consists in a radical impediment to the ability to be opened to others.

Keywords:

自己、障害、自閉症、他者関係、エイブルアート

Self, Disability, Autism, Relationship with Others, Outsider Art

1. はじめに

本発表は、宮城県内のある障害児・者支援団体(NPO法人)の協力のもとで筆者がおこなった、自閉症児療育の実地研修にもとづいている。二〇〇八年設立の当団体は、主に地域の障害児・者の療育および自立支援を事業内容とし、同時に、地域に向けて事業活動の説明や障害に対する理解の普及のための講座や講演を定期的に開催する、活動的な団体である。

まず、自閉症とはどのような在り様を呈する障害か。一度でも関わったことのある人ならば容易に思い描けるが、そうでない人には難しい。また近年は、自閉症の作家・詩人である東田直樹氏の活動によって、病態の認知度は上がっているかもしれない。おおよその定義としては、「自閉症とは、①対人関係の障害、②コミュニケーションの障害、③パターン化した興味や活動、の三つの特徴をもつ障害で、生後まもなくから明らかになる。最近では症状が軽い人たちまで含めて、自閉症スペクトラム障害という呼び方もされている」(厚生労働省)。東京自閉症協会は三つの特徴のうちの③を、「イマジネーションの質的障害」と言い換えてもいる。いずれにせよ、具体的には、自分の世界に閉じこもっていて、他人と目を合わせず、言語に難があり、こだわりが強い障害、と言えるだろう。さて、そうした概念的な説明と実際とは、やはり大きく異なっている。そうした説明が間違っているというわけではもちろんない。たしかに説明の通りであることには違いないのだが、実際の様相は、想像されるよりもはるかに根本的な意味でそうなのである。たとえば私が出会った最初の自閉症児R(七歳男児)は、名前を呼んでも振り向かないし、肩を叩いても、頭を撫でて、手を握っても、頬を

つまんでもこちらを見ることがない。また、発声はあるが発語はなかった(こちらが理解できる言葉を発さないということ)。

本稿では、こうした自閉症者の内的世界の一端を理解するべく、彼らの制作物(主に素描)——心的領域の表出物——を手がかりとして、自己性の問題とその構成に関わる他者の問題とを分析・考察している。

2. 印象——「見たまま」——の描出

二〇〇六年、イギリスの画家スティーブン・ウィルシャーは、芸術へのその貢献が認められ、大英帝国勲章を受章した。写真1は彼の作品である。作風は、見られる通り、細部まで緻密に描き込み、実際の風景を忠実に再現するものである。彼のこの画法はしばしば「直観記憶」や「写真様式」等々と呼ばれている。あるTV番組がウィルシャーの制作風景を映している。彼は対象となる風景を決めると、二十分から三十分ほどその場に留まり、ひたすらその光景を眺め、文字通り、目に焼きつけていた。そしてアトリエに帰り、一気にその絵を仕上げた。写真1と同様、実際の風景と変わらぬ、詳細で正確な再現であった。



写真1: Stephen Wiltshire, *Aerial view of the Nine Elms Development, London* (594 x 420mm)

現在四十五歳のウィルシャーは、子供の頃から自閉症である。番組を見たかぎりでは現在の彼はそれほどコミュニ

ケーションに問題はなさそうだが、子供の頃は母に抱かれることさえ嫌がり、幼少期のほとんどを養護施設で過ごしたという。彼が絵を描くようになったのは養護学校に通っていたときで、養護学校の校長先生があるとき彼に紙とペンを渡したところ、夢中になって描くようになったそうだ。

研修先にも一人、好んで絵を描く子供がいた。このT(九歳男児)もまた自閉症だが、先のRよりは目も合うし、言葉も話し、他者とのコミュニケーションは不可能ではなかった(それでも「定型発達児」にははるかに及ばない)。Tが描く絵には、地図やカレンダー、看板や建物、オブジェ、信号、道路、階段といったものが多く見られるが(写真2~5)、この年頃の男児が一般に描くような、怪獣や正義の味方、アニメやゲームのキャラクターといったものはほとんど描かれない。



写真2: カレンダー

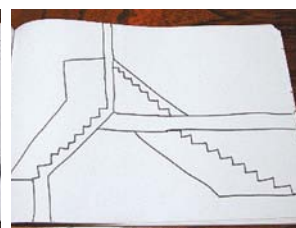


写真3: 階段

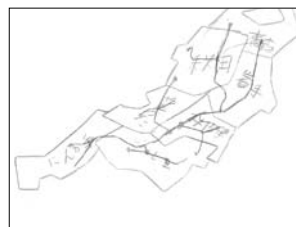


写真4: 地図(東北)

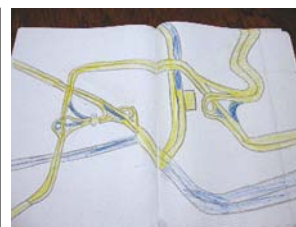


写真5: 高速道路ジャンクション

自閉症児がしばしばこの種の絵を描くことはよく知られているし、これらモチーフ(建築物、人工物、無機物)の延長上にウィルシャーの作品群も位置づけられることは間違いないだろう。自閉症者が特徴的にこの種の対象をデッサンするという事実は、当然、そこには彼らの内的世界が表されていると考えることを可能にする。それを考察するのに、Tの「キャラクター」の絵が糸口となる(写真6~8)。

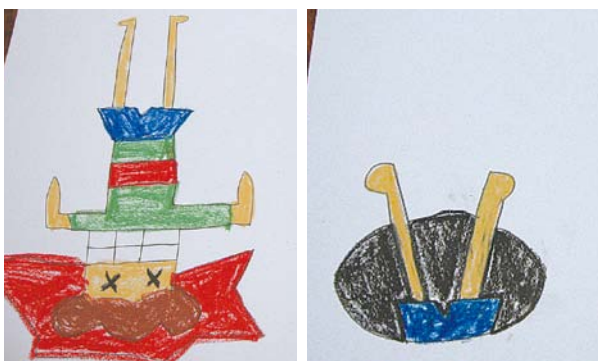


写真6

写真7



写真8

Tにしては珍しく、ここではマンガのキャラクターを描画対象としている。写真8がその元となったマンガの絵である。だが、奇妙なことに気づく。キャラクターはまだしも、その元のマンガ本それ自体を絵に描くということは、一般の子供ではあまりない。ここでも自閉症児に特有の対象把握があると考えざるをえない。そして実は、写真6と7も単なるキャラクターの絵ではない。二枚とも、マンガに実際に描かれている場面からの抽出である。どちらも元のマンガの一コマであり、Tはそのコマからそのまま写し出している。キャラクターのポーズを変えるでもなく、服装を変えるでもなく、一切アレンジを加えることなく、「見えたまま」を描いている。

この点に立脚すれば、Tの絵は本質的にウィルシャー的であると言えるだろう。言い換えれば、Tの絵は一般の子供らしいものではないが、自閉症らしいものであるだろう。ウィルシャーにせよTにせよ、彼ら自閉症者は文字通り「印象」を描いている。強く心に刻印された対象がそのまま(ときに組み合わせられて)絵にされている。さきほどのウィルシャーを特集した番組でコメンテーターを務めていた日本画家の千住博氏は、ウィルシャーの絵を「自己表現ではなく世界表現の絵画」と評していた。千住氏によれば、西洋絵画の歴史が

「自画像」に極まるような自己表現、自己主張をめぐって積み重ねられてきたのに対して、ウィルシャーの絵画は世界表現にのみ徹しているという。言い換えれば、「見たまま」のウィルシャーの絵は、自己主張のない、世界の純粋な表現である。それがウィルシャーの絵であり、ひいてはTの絵にも当てはまる分析である。Tの絵も純粋な世界表現なのである。

これは驚くべき指摘である。なぜなら自閉症とは、文字通りには、自分の内側に閉じこもり、そのかぎりでの外の世界にはほとんど関心がないはずだからである。そしてそうであるからには、自閉症の絵師たちが表に出す(ex-press)ものは、「自己」以外には何もなければである。しかし実際には、彼らは世界を純粋に表現していると言われ、むしろ、表現された「自己」などどこにも見当たらない。いったい、彼らが閉じこもっていると言われる内面、あるいは自己なるものとは、どのようなものであるのか。

3. 印象の体験

自閉症児はよく「放浪」と言われる。親にも誰にも言わずに一人でどこかへ出かけてしまうのだ。けれど、それは何の目的もなくぶらぶらするというのではなく、彼らなりの目指すものがあるようである。村瀬学氏は実際に、ある小学五年生の自閉症の子の「放浪」に一日付き添い、そこで気づいたことを次のように述べている。

この「小さな旅」に同行して、わかったことがある。それは、Kちゃんが、自分の頭の中の地図を繰り返し追体験して確実なものにしている、というものだった。幼稚園の頃から始まっていた電車への関心は、駅名を覚えることで「地図」として広がって行って、その「地図」が家族との「遠出」で実体験され、「地図」がただの暗記物でなくなっていった。¹

地図を描くことの好きなKちゃんは、どうやら、その地図を確認するために「放浪」という。この追体験への欲求がKちゃんを放浪へと駆り立てる。

なぜ、追体験を欲するのか。「地図」の確認であるとすれば、そもそもなぜその「地図」を描いたのか。それは言うまで

もなく、それとの出会いの体験、「原体験」が心地良いものだったからであろう。人間の純粋な表現欲求の始源はそれ以外にはない。この原体験が心地良いからこそ、その対象が「好きなもの」となり、何度も絵に描かれ、実際にもう一度体験したいと思われるにちがいない。そしてその体験はまさしく、言葉の文字通りの意味で、印象的な体験である。そのとき、外の世界(の事物)が私の内に刻印(impress)される。こうした特別な瞬間について、自らも自閉症であるドナ・ウィリアムズがその自伝的著書で次のように語っている。

「ピンクの街灯!」と叫んで私は街路を横切り、光り輝く一五フィートの神のもとで立ちすくんだ。私は光り輝く神のシンボル[ピンクの街灯]の真下で、その色の本性を感じ取ろうとして次第に深く深くその光の「内側」に入ってしまった。やがて私は自分が誰なのか、何なのかという感覚を失ってしまった。一色一色が、私のうちに違った感情を呼び覚まし、それと共鳴し合った。²

外界からの刺激へ没入し、自分と世界との境界が曖昧となり、それによって自分のなかにまたべつ³の感覚が呼び覚まされるような状態、おそらくこれが上での「原体験」と呼べるような瞬間である。これは狂気の世界ではまったくない。私たちも日常生活でときに体験している状態である。たとえば、ある雨上がりに虹を見かけたとき。普段なら気にも留めない単なる自然現象であるのに、その日ばかりはやけに美しく見える。ただただ美しく、単純に「感動させる(impressive)」。他にも、夕日だったり、月だったり、海や山、川や滝、花や木、雲や動物等々において、人それぞれに、このような印象深い体験をもったことがあるだろう。この体験を丹念に分析してみれば、ドナ・ウィリアムズの証言に近づくことは明らかである。

4. 境界の消失

われわれ「定型発達」の人間にもこうした印象体験は起こる。ただし、実際に起こるのは本当にごくまれである。これに対して、自閉症の子供たちにはこうした体験が容易に起こる。「重度」であるほど、簡単に印象づけられてしまう。体験自体は共通に起こりうるにもかかわらず、われわれと彼ら

のあいだにあるこの違いは何か。

共通するこの体験から考察してみよう。ドナ・ウィリアムズは次のように言っていた。「その色の本性を感じ取ろうとして次第に深く深く色の内側に入ってしまった。やがて私は自分が誰なのか、何なのかという感覚を失ってしまった」。ここでは、端的に言って、「私」と「色(光)」の区別が消えている。前者(内界)と後者(外界)の差異が曖昧になるか消失するところで、印象体験が起こる。より正確には、外界の事象が内界との壁を突破してくるとき、それが起こる。あるときはふと緊張が解けて隙間が生じ、外界が内界に浸透する、またあるときは暴力的に隔壁——「保護膜」(フロイト)——が破られて外界が内界に刻まれる(この場合その体験は「心的外傷」となりやすい)。してみれば、印象体験の生起頻度は、内界と外界のこの隔壁の強度に依存していることになろう。そして厳密には、隔壁の強度とは結局のところ「自己」なるものの強度である。

われわれは普通、「自分」と「自分でないもの」との区別をはっきりさせている。私はこの紙とは違うし、このペンとも違う。また当然、私とあなたはお互いに別々の人間である。だがこの感覚は、実は、「私」という審級が比較的しっかりと形成されていることにもとづいている。「私」が確定されるからこそ同時に「私でないもの」も確定されるのであって、逆に言えば、「私」がなければ「私でないもの」もない。上で叙述した印象体験は、まさしくこの後者の状態である。なんらかのきっかけで、そこでは「私」も「私でないもの」もなくなり、通常の自他の区別は消失している。してみれば、この状態がしばしば起こるとされる自閉症では、したがって、そもそも「私」や「自己」と言われる審級が定型発達者ほどには十分確立されていない、という想定が成り立つだろう。実際、精神分析家のフランセス・スタスティンはその点をはっきりと指摘している。

自閉状態[autism]の文字通りの意味は、自己によって生きるということである。観察者には自閉状態にある子供は、外界にほんの少ししか反応を示さないため、自己中心的に見える。しかし、逆説的に、このような状態にいる子供は、「自己」という感覚はほとんどないのである。³

自己という感覚が弱いとすぐ自他の区別が曖昧になり、忘我状態になる。反対に、自己感がはっきりしていれば

ば、自他の区別は明確であり、めったに外界に心奪われることはない。そして、このような自他の区別を前提にしてこそ、われわれの社会は成り立っている。私とこの物は別であり、私とあの人は別の人間である。これは私の物であり、あれは彼女の物である。私の行為は私に帰属し、彼女の行為は彼女自身に属する。自分が叩いておきながら、叩かれたと主張することはできない。大人になること、子供の社会化(教育)とは、こうしたルールの獲得過程である。それゆえ前提として、子供のなかに自他の区別が、萌芽的であれ、生じていなければならない。ある程度の自己感があり、それによってある程度の自他の区別が成立しているからこそ、社会の規範が認識され、理解されるのである。

けれども、自閉症児では定型発達児に比べてこの自己感が弱く、結果、自他の区別も非常に弱い。彼らはよく他人の物を勝手に取ったり食べたりし、それゆえ「自己中心的」と見られるが、それはそもそもそれが「他人」の物であるという認識がないからである。そしてその他者認識の欠如は、逆説的にも、「自己」なるものがそもそも十分確立されていないからである⁴。

5. 常同行動

タスティンが指摘する通り、自閉症児には「『自己』という感覚はほとんどない」。だが、「ほとんどない」とは「まったくない」ではない。自閉症児における自己感、微弱ながらも、ある。それが療育の可能性を保証する。

自閉症に特有な行動のひとつに、「常同行動」と呼ばれるものがある。同じことを何度も繰り返す行動で、たとえばミニカーを延々と並べたり、同色またはパターン化された色の組み合わせでブロックをひたすらつなげたり、音楽の同じ章節ばかりを何度もリピートさせて聴いたり(多くの場合、イントロの章節)、といった行動である。同じ運動感覚あるいは感覚刺激の反復である。今挙げた音楽の例は、冒頭で紹介したRの常同行動である。Rはまた、バランスボールに座ってひたすら上下に揺れることも、好んで反復していた。絵を描くTにはあまりこうした行動は見られず、彼の場合はもっぱら絵を描いていることが多かった。だが、そこで描かれるものには同様の傾向が見られ、つまり同じモチーフが何度も描かれたり(写真9～11)、パターンや規則性が感じられる絵

が見られた(写真12～15)。Tの場合ではそうした水準での常同性があるように思える。

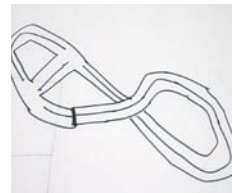


写真9

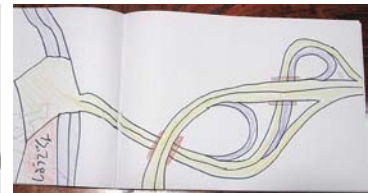


写真10

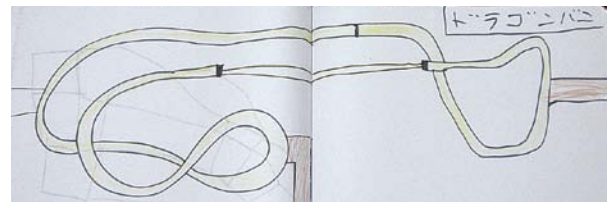


写真11



写真12



写真13



写真14

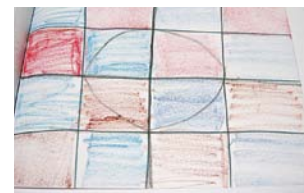


写真15



写真16: ブロックの組み合わせ



写真17: ブロックの組み合わせ

こうした繰り返しの行動について、村上靖彦氏は次のように分析している。

並べ遊びや感覚遊びの場合、単純な皮膚感覚の反復・形・運動の知覚への没頭が必ず見られる。つまり一定の形・リズムを、快適な体験として構成していることになる。このような常同行動は、感覚が感覚を触発する自己触発といえる。再帰的な触発のなかで、体験の連続性(=自己性)を生み出しているのである。⁵

われわれが音楽を聴くとき、ひとつひとつの音符はばらばらに聞こえるわけではない。各音はひとりずに連合し、メロディーを形成して私たちに聞こえてくる。しかもそれは私たちが意図せずとも、自動的・受動的に起こる。自閉症児たちにとってもおそらく事情は同じで、それゆえ、音楽を好んで聴く子供たちは、そこで得られているだろう音の統一感、自動的に構成されるメロディーの調和に、心地よさを感じているのだろう。そうした感覚はまた、連続的・反復的な行為からも得られる感覚である。そして、村上氏によれば、そこにおいて一種の自己感が生じる。自己がほとんどないと言われる自閉症児において、常同行動が自己性を生み出す⁶。

6. 自己存在感

ただしそれは一時的で受動的な自己感覚であり、音楽が止まればメロディーが消え去ると同様に、常同行動が止まればこの自己感覚も消失する。それゆえこの自己は、われわれが「行為の主体」と言うときのような、ある程度持続する能動的な自己とは異なる。だがそれは、後者より以前のより根本的な、「私が存在する」ということの意味である。小児科医で精神分析家のD・W・ウィニコットは、どんな自己意識の主体も、どんな心理的自己同一性も、幼児期の母子関係のなかで得られる「存在感(the sense of BEING)」という基盤がなければ生じえない、ということを発見した⁷。行為(doing)の主体は、存在すること(being)の感覚が先に確立されてこそ、登場することができる。幼児期のいわゆる「愛着行動」はこの存在感の確立のためにこそある。母親(あるいはその役割を担う人)に抱かれることで、私が受け入れられ、私の存在が承認される。こうして安心感、安定感が得られて初めて、人は行為できる⁸。

自閉症児について言われる自己感の欠如は、こうした存在感の欠如である。それを補完してくれるのが、彼らにとっ

ては、常同行動である。村上氏は次のように述べる。

常同行動とは、彼らにとっての了解可能性の地平そのものであり、安心感を作り出す構造である[…。](定型発達においては母子関係において成立するであろう)自己性の基盤となる安心感の構造を作り出す装置として機能しているのである。⁹

連続的な感覚が統一性をもたらし、「感覚の破綻の回避」にくわえて、定型発達であったら母子の抱っこで成立する安心感の構造の「代替物」を与える¹⁰。それゆえ、反対に、繰り返しの行為から得られていた統一感が失われれば、自身の存在感も失われ、不安になる(「《感覚の組織化=自分の存在の全て》であるから、感覚が破綻するとそのままそれは自分自身の破綻になる」¹¹)。行為の中断が突然であるほど、そうなる。だから「かんしゃく」を起す。かんしゃくは、G・ガーランドによれば、恐怖である(「人は私のかんしゃくを怒りと解釈していたが、実はそのほとんどは、純粋な恐怖だった」¹²)。行為の中断は自身の存在感、安心感の喪失である。自己感のそうした喪失は一挙に不安を呼び起こし、恐怖となる。

こうした不安から、あるいはそれを避けるために、常同行動が起こる。常同行動の反復はひとつの秩序であり、恒常性をもたらす論理的な一貫性である。それは安心と安定を与える。しかし他方で、それは例外を許容できない「頭の固い」論理である。自閉症に見られる「こだわり」はここに由来する。だがそれは、上記の通り、彼らの存在に関わる極度に重大な問題である。タスティンは、ある自閉症児について、「感情が物理的実体として体験されているように見える」と言う。それゆえ、こだわりや反復の妨害によって自己感(の獲得の試み)が失われるとき、「不安はコントロールできない物理的なものとして一挙に入り込む。喪失の痛みは心的痛みというより、むしろ身体的痛みとして体験されているように見える」¹³。この観点から、自閉症児における自傷行為は、侵入してきたこの身体的(と感じられているように見える心理的)な痛みを追い出そうとする試みとして解釈することもできる。同時にまた、村上氏が指摘する通り、「たとえば頭を叩きつづける行為は一見自傷行為に見えても、それによってかろうじて成立している体の感覚=自己性の感覚を確保している」¹⁴とみることもできよう。

自己存在感の確立は、定型発達に恵まれた子供であれ

自閉症児であれ、人生の最初期の必須の課題である。そしてこの課題は一般に、つまり定型発達児においては、幼児期の母子関係において達成される。他方、自閉症児においてはそもそもこの関係が構築できない。彼らはそもそも他者へと開かれていないように見えるからである。したがって、代わりに、自閉症児は常同行動を繰り返し、ここから得られる連続的な刺激によってつかの間の自己感を享受する。実のところ、子供をもつ親であればすぐさま気づかれるように、常同行動のようなものは定型発達児においても観察される。子供たちはときに、大人から見れば過剰とも言えるほど、同じ行為を反復することがある。その理由は結局、自閉症児における常同行動と同じである。ただし両者の違いは、一方ではそれに加えて親子関係によっても十全に目的が達成されてゆくのに対し、他方では常同行動によってのみ達成しようと必死に努力するところにある。自己存在感の確立には決定的に他者の助けが必要なのである。自閉症においては、以上のように、そもそも他者への開けが阻害されているところに問題の本質がある、と言ってよいように思う¹⁵。

7. おわりに——自閉症児における自己性の芽生え

自己獲得の課題。これが自閉症児における喫緊の課題である。研修中、それが徐々に成し遂げられていることが垣間見られるような作品に出会った。

研修後半のある日、Tと床で遊んでいたとき、ふいにTが私の顔を触り始めた。目、鼻、口、耳。そして自分の顔の同じ部分を触った。目、鼻、口、耳。私は彼の手を取って、同じ動作を繰り返させた。私の目、彼の目、私の鼻、彼の鼻、と交互に触れさせた。Tの目と私の目は合っていた。不思議そうな表情をしたり、喜んだように笑ったりしながら、Tは続けた。

この動作にはいったいどんな意味があるだろうか。単に目の前にある対象(私)の部分や形に興味をひかれて触れただけかもしれない。だが、その対象は単なる物ではなく人間であり、自分自身(T自身)と同じ存在者である。そうすると、Tが私の顔の部分に触り、それから自分の顔の同じ部分を触ったのは、「自分と同じ何か(他人)が存在している」という事実への本格的な気づきの兆候あるいはその確認であったかもしれない。そして他者への気づきは自己への気づきと連動している。他者の存在を認識することこそ、自己

存在の認識へとつながる。

この出来事より数日前のことだが、この考察を裏付けうるような絵をTは描いていた(写真18)。

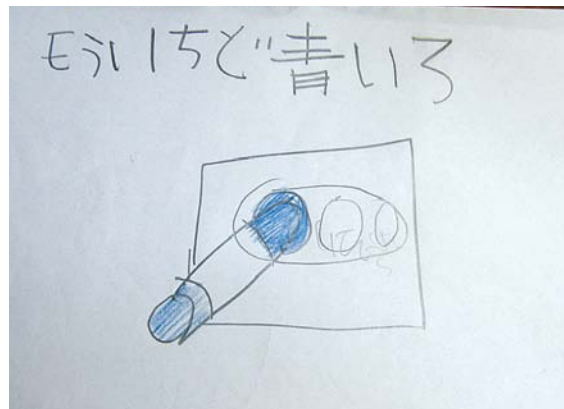


写真18

これは単なる絵ではなく、絵を描いている絵である。しかも、この明らかな主観視点での構図からして、これは自分が絵を描いている絵であり、すなわち一種の自己反省の表れである。なぜなら、Tがこの絵を描くためには、自分が絵を描いているということ、あるいは絵を描いている自分というものを客観的に思い描き、自分を対象化せねばならないからである(画中の「もういちど青いろ」というセリフ(?)が、絵を描くという行為がTのなかで客観的に観察されていることを表わしている)。自己を客観視するこの能力は、もちろん人から教わって獲得されるものではなく、自己性ないし自己存在の感覚が徐々に確立されてくるとともに、おのずから生じてくるものである。したがって、Tがこうした自己対象化(の兆し)の絵を描いたということは、これまで自らおこなってきた常同行動そして周囲から無自覚に受け取ってきた安心と安定のおかげで、Tのなかで彼の自己性がしっかりと養われてきたことの証左だろう。部外者ながら、こうした現場に居合わせる事ができたことを、本当に幸運に思った。

註

1. 村瀬学『自閉症』ちくま新書、二〇〇六年、九九頁。また、村瀬氏はこの放浪という観点から、「裸の大將」こと山下清もまた自閉症あるいはその傾向があったらうとみている。
2. ドナ・ウィリアムズ『自閉症だった私へ Ⅲ』河野真理子訳、新潮文庫、二〇〇五年、二八頁。
3. フランセス・タスティン『自閉症と小児精神病』齋藤久美子監修、平井正三監訳、辻井正次他訳、創元社、二〇〇五年、三一四頁。
4. それゆえ彼らは非社会的である。言い換えれば、自閉症児・者は反社会的であるわけではない。反社会的であるためにはそもそも社会の規範を認識・理解していなければならない。認識し、理解しているからこそ、その道を外れることができるのである(この意味では反社会的な人間とは、いまだ社会的である)。これに対して自閉症児は社会の規範、人間同士のルールを認識し、理解することに苦しむ。彼らはそもそも自分という感覚が弱く、その結果、自分とそうでないものとの区別が曖昧だからである。
5. 村上靖彦『自閉症の現象学』勁草書房、二〇〇八年、一〇八頁。
6. 周知のように、ゴッホは自画像を多数描いたが、その反復もこれと同様の意味があるように思われる。ただしゴッホの場合は自己性の構築ではなく再構築(の試み)であっただろう。「ゴッホの自画像の中には、そうした自分自身の精神の緊張、危機を記録し、描くことによって、場合によってはそれを克服しようとさえる試みが見られる」(太田泰人「絵の中の画家——近代芸術家の自己表象」、三浦篤編『自画像の美術史』所収、東京大学出版会、二〇〇三年、一一九—一二〇頁)。
7. ドナルド・W・ウィニコット『遊ぶことと現実』橋本雅雄訳、岩崎学術出版社、一九七九年、一一二頁。
8. したがって、児童虐待においてこの確立が阻害されるということがどれほど深刻な問題であるかは、容易に想像できるだろう。彼らは不安定な自己存在感のためにつねに不安であり、行動に困難をきたす。また、被虐待児がときに自閉症に似た症状を呈することがあるというのは、両者において問題となるのがこの点だからであろう。そのため、かつては自閉症の原因が母親に帰せられるという不幸な時代があった。今ではそれは完全に否定されているし、同時に、被虐待児に見られる自閉傾向と、自閉症児の自閉症状とが似て非なるものであることも説明されている。両者の決定的な違いは、被虐待児では子供自身が親(他者)に対して安心感を希求する(にもかかわらず、なんらかのかたちで拒絶される)のに対して、自閉症児ではそもそもそうした親(他者)への要求それ自体が起こらないところにある。
9. 村上靖彦、前掲書、一八二頁。
10. 同書、一八三頁。
11. 同書、一八二頁[強調引用者]。
12. グニラ・ガーランド『ずっと「普通」になりたかった。』ニキ・リンコ訳、花風社、二〇〇〇年、四九頁。
13. F・タスティン、前掲書、二八頁。
14. 村上靖彦、前掲書、五頁。
15. したがって、自閉症児への療育はまずは「他者への気づき」を促すことにその本質がある。村上氏はこれを「視線触発」と呼

ぶ。自閉症児の視線を他者(の目)へと向かせる介入である。自閉症児の世界へと入り込み、他者の存在を気づかせるための手がかりが、まさしく常同行動である。「常同行動は、通常考えられているのとは異なり、自閉度の指標ではない。そうではなくて、〔…〕世界と安定した関わりを持つための方略なのである。／であるから、常同行動を通じて彼らは閉じているのではなくて、世界へと開かれているのである。そのため、自閉症児が視線触発を発見するプロセスは、常同行動への大人の介入を通してであることが多い。たとえば並べ遊びに介入したり、あるいは彼の常同的な自己刺激と同じ感覚を与えてみたりすることが、他者への気づきのきっかけになることがある。つまり常同行動こそ世界への窓であり、そこを通して次に対人関係の次元も発見してゆく」(村上靖彦、前掲書、一八八頁)。

私が研修先で教わった関わり方も、本質的に、常同行動を通して子供たちに近づくことだった。そして実際、研修開始から約一ヶ月後(研修終了間近)、冒頭で登場したRと目を合わせることでできた。

参考文献

- ・ウタ・フリス『新訂 自閉症の謎を解き明かす』富田真紀・清水康夫・鈴木玲子訳、東京書籍、二〇〇九年(初版一九九一年)
- ・内海健『自閉症スペクトラムの精神病理:星をつぐ人たちのために』医学書院、二〇一五年
- ・内海新祐『児童養護施設の心理臨床——「虐待」のその後を生きる』日本評論社、二〇一三年
- ・岡南『天才と発達障害』講談社、二〇一〇年
- ・川崎二三彦『児童虐待——現場からの提言』岩波新書、二〇〇六年
- ・グニラ・ガーランド『ずっと「普通」になりたかった。』ニキ・リンコ訳、花風社、二〇〇〇年
- ・杉山登志郎『発達障害の子どもたち』講談社現代新書、二〇〇七年
- ・杉山登志郎『発達障害の豊かな世界』日本評論社、二〇〇〇年
- ・杉山登志郎『発達障害のいま』講談社現代新書、二〇一一年
- ・杉山登志郎『自閉症の精神病理と治療』(杉山登志郎著作集1)、日本評論社、二〇一一年
- ・杉山春『児童虐待から考える——社会は家族に何を強いてきたか』朝日新書、二〇一七年
- ・竹内章郎・藤谷秀『哲学する〈父〉たちの語らい:ダウン症・自閉症の〈娘〉との暮らし』生活思想社、二〇一三年
- ・玉井収介『自閉症』講談社現代新書、一九八三年
- ・テンブル・グランディン『我、自閉症に生まれて』カニングハム久子訳、学習研究社、一九九四年
- ・テンブル・グランディン『自閉症の才能開発—自閉症と天才をつなぐ環』カニングハム久子訳、学習研究社、一九九七年
- ・テンブル・グランディン『自閉症感覚 かくれた能力を引き出す方法』中尾ゆかり訳、NHK出版、二〇一〇年
- ・ドナ・ウィリアムズ『自閉症だった私へ I』河野真理子訳、新潮文庫、二〇〇〇年

-
- ・ドナ・ウィリアムズ『自閉症だった私へ II』河野真理子訳、新潮文庫、二〇〇二年
 - ・ドナ・ウィリアムズ『自閉症だった私へ III』河野真理子訳、新潮文庫、二〇〇五年
 - ・ドナ・ウィリアムズ『ドナ・ウィリアムズの自閉症の豊かな世界』門脇陽子・森田由美訳、明石書店、二〇〇八年
 - ・ドナ・ウィリアムズ『自閉症という体験——失われた感覚を持つ人びと』川出鷹彦訳、誠信書房、二〇〇九年
 - ・ドナルド・W・ウィニコット『遊ぶことと現実』橋本雅雄訳、岩崎学術出版社、一九七九年
 - ・ドナルド・W・ウィニコット『情緒発達の精神分析理論——自我の芽ばえと母なるもの』牛島定信訳、岩崎学術出版社、一九七七年
 - ・ドナルド・W・ウィニコット『子どもと家庭——その発達と病理』牛島定信監訳、誠信書房、一九八四年
 - ・中村尚樹『最重度の障害児たちが語りはじめるとき』草思社、二〇一三年
 - ・東田直樹『自閉症の僕が跳びはねる理由——会話のできない中学生がつづる内なる心』エスコアール、二〇〇七年
 - ・東田直樹『続・自閉症の僕が跳びはねる理由——会話のできない高校生がたどる心の軌跡』エスコアール、二〇一〇年
 - ・東田直樹『跳びはねる思考 会話のできない自閉症の僕が考えていること』イースト・プレス、二〇一四年
 - ・フランセス・タスティン『自閉症と小児精神病』齋藤久美子監修、平井正三監訳、辻井正次他訳、創元社、二〇〇五年
 - ・村上靖彦『自閉症の現象学』勁草書房、二〇〇八年
 - ・村瀬学『自閉症——これまでの見解に異議あり!』ちくま新書、二〇〇六年
 - ・モーリス・メルロ=ポンティ「幼児の対人関係」、『眼と精神』所収、滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、一九六六年